

マルクス経済学

政治経済学部1年 宮本幹也

目次

序：マルクス主義と経済

1. 動機

2. マルクスの紹介

3. マルクス主義における経済の重要性

第一部：マルクスの経済理論

4. 労働価値説

5. 剰余価値

第二部：現代のマルクス

6. マルクス経済学の現代応用

7. まとめ

序：マルクス主義と経済

1. 動機

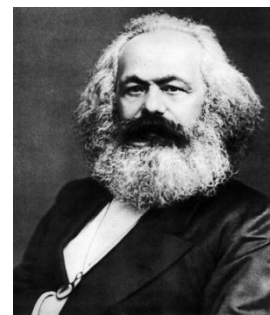
マルクスというと社会主義革命に大きな影響を与えた革命家として有名であることから、マルクス経済学と聞いて漠然と社会主義について論じている人も多いと思う。しかし、マルクスが経済学を研究した理由は資本主義経済の基本的法則とその矛盾を明らかにするためであった。（これはマルクスの著作『資本論』で書かれている。）つまり、資本主義経済の分析を行っているのである。私たちが生きる現代経済を理解しその改善点を模索する上でマルクス経済学を学ぶことは大きな価値をもつ。本勉強会では以下の三つの観点の理解を促すものである。

- 1) マルクス主義における経済の重要性
- 2) マルクス経済学の理論（第一部）
- 3) マルクス経済学の現代応用（第二部）

2. マルクス紹介

カール・マルクス（1818～83）

プロイセン王国（ドイツ）出身であり、イギリスで活躍した社会思想家・経済学者である。フリードリヒ・エンゲルスと



もに科学的社会主義、いわゆるマルクス主義を打ち立て、資本主義の高度な発展により共産主義社会が到来する必然性を説いた。資本主義社会の研究を行い著書『資本論』の中でまとめ、その『資本論』に依拠した経済学がマルクス経済学と呼ばれている。

3.マルクス主義における経済の重要性

マルクスは経済だけでなく哲学に対しても関心を抱いており、ドイツ哲学から影響を受けている。特に、ヘーゲルの弁証法やフォイエルバッハの唯物論からマルクスは大きな影響を与えられ、それらを参考にしつつも批判的に受け入れ独自の哲学である唯物史観（唯物論的歴史観）を形成した。

唯物史観とは？

端的にいうと、経済構造（下部構造）の変化によって社会的意識（上部構造）が形作られるということである。人間は生活に必要な物資を生産し消費しなければ生きていくことはできない。これは有史以来変わらぬことである。そして人間は常に豊かさを求めて生産力を強化する方法を模索し、歴史的にみると実際に生産力の水準はあがってきた。生産力の水準が上がると、生産関係¹にも変化が生じてくる。こうした生産力とそれに対応して取り結ばれる生産関係を唯物史観では経済構造（下部構造）という。経済構造は時代によって変化していくものでそれに伴って社会的意識²（上部構造）が形成されるということである。

歴史の流れの中で経済構造の変化に伴って社会的意識が形成される過程を見ていきたいと思う。

| 時代 | 原始 | 古代 | 中世 | 近代 |
|----------------|-------|--------------------|--------------------|----------------------|
| 経済・社会制度 | 共産制 | 奴隷制 | 封建制 | 資本主義制 |
| 生産関係・階級関係 | 存在しない | 王・奴隷主 v s 奴隷 | 国王・武士 v s 農民 | 資本家・会社 v s 労働者 |
| 代表的な時代 ＜日本＞ | 縄文 | 古墳～平安 | 鎌倉～江戸 | 産業革命後 |

必要労働＝自分や家族の生活に必要なものを獲得または生産する労働
 剰余労働＝必要労働以上の労働

¹ 生産を行う場合に人間が相互に取結ぶ一定の社会的諸関係

² 資本主義、社会主義などの制度のこと

ポイント

- 経済構造が社会的意識（制度）を形づくる。
- 歴史の流れの中で経済構造は絶えず変化しており社会的意識（制度）はそれに応じて変化する。
- 資本主義（社会的意識）も例外ではなく経済構造が変化すれば新しい形に生まれ変わる。

第一部：マルクスの経済理論

4.労働価値説

一人間の労働が価値を生み、また労働が商品の価値を決めるという考え方。アダム・スミスやデービット・リカードなどを中心とする古典派経済学においてこの理論は発展し、マルクスが受け継いだ。

商品であるための三要件

第一に、商品は人間の何らかの欲望を満たす性質＝有用性を持っていないてはならない。

EX)衣食住のための生活必需品

この有用性を持つという性質のことを使用価値と呼ぶ。人によって欲望は違うわけであるから、商品が持つ使用価値は人それぞれ異なることになる。

第二に、商品が自分にとって使用価値を持つだけでなく、他人にとっても使用価値をもつものでなくてはならない。**EX)**オリジナルのCD

商品は市場の中で交換されるものであるから他人からもその商品が持つ使用価値を認められなくてはならない。

第三に、労働生産物でなくてはならない。**EX)**ミネラルウォーター

例え、自分も他人もその商品に使用価値を認めていたとしても自然のままでは商品にならない。労働を加えることで商品となるのだ。

また、商品は市場の中で交換されるわけであるから、ほかの商品との相互的な関係の中で交換比率がある。このことを交換価値という。**EX)** X量の小麦=Y量の綿布

つまり、X量の小麦は、麺やパンなどに加工できるという使用価値を持つとともに、Y量の綿布と交換できるという交換価値を持っているといえる。

ここではX量の小麦=Y量の綿布という等式がしているが、等式が成立ということは小麦と綿布の間には何か共通のものが存在していて、その量が等しいことになる。その共通のものを価値ということにする。この価値の実態とは何であろうか。

マルクスはこれを、労働である、ととらえる。

異なる使用価値を持つ二つの商品に共通で同質なものは労働で生み出された生産物であるという点である。もちろん労働で生み出されたものであるとは言っても、小麦を作る労働と綿布を作る労働は同じ作業ではないから比べることは難しい。しかし、筋肉やエネルギーを使って行われるという性質は同じである。なので、労働を同質のものとしてみれば、小麦を作るのにかかった労働量（時間）と綿布を作るのにかかった労働量（時間）が等しいから価値が等しいといえる。つまり、商品の価値（交換価値）とはその商品を作るために必要な労働量（時間）によって決定されるのである。

ポイント

- 商品は使用価値と価値（交換価値）の二つを持つ。
- 商品の価値は生産に必要な労働量によって決定される。
→つまり労働が価値を生み出す

5.剰余価値

一商品を生産する段階において労働者の行った労働は、労働者の生活に必要な労働（必要労働）とそれを超える分の剰余労働に分けられ、このうち剰余労働によって生み出された価値を剰余価値という。

商品の生産活動

$$G \text{ (金)} - W \text{ (商品)} \left\{ \begin{array}{l} P_m \text{ (労働手段・原材料)} \\ \dots P \text{ (生産活動)} \dots W' - G' \\ A \text{ (労働力商品)} \end{array} \right. \left\{ \begin{array}{l} G \text{ (元金)} \\ G' \text{ (利益)} \end{array} \right.$$

ここにおいてG'分だけ利益が出ていることがわかる。この利益はW（商品）をW'に生産活動を通して価値を増加させたから生まれたものである。では、この利益は生産活動の中でどこから生まれてきているのであろうか。P_m（労働手段・原材料）の価値はそのままW'の価値に移転される。では、労働力商品の価値はどうであらうか。労働力商品は価値を新たに生み出すものであって、P_mのように価値を移転させるものではない。つまりW'のP_m部分を除く新たな価値を労働力商品は生み出す。よって利益は労働力商品が生み出したものなのである。

整理すると

- ・労働力商品の価値（賃金）
＝労働力を生産するのに必要な物資を購入するために必要な労働量（必要労働）
- ・労働力商品の使用価値＝労働によって商品に新たな価値を与えること（総労働量）

・労働力商品の使用価値－労働力商品の価値＝利益（剰余労働）

つまり資本家が得る利益（剰余価値）は労働力商品の必要労働を超える部分である剰余労働によって生み出された部分である。

ポイント

● 資本家が得る利益（剰余価値）は労働力商品（労働者）によってもたらされたものである。

三種類の剰余価値生産

資本家は剰余価値（利益）を生み出すことが目的であるからそのために様々な手段をとる。

1) 絶対的剰余価値生産

－剰余労働の延長

2) 特別剰余価値生産

－社会的平均価値と個別資本の差

個別資本家は市場でのこっていくために技術開発や新生産方法の導入などの方法をとって生産力を向上させようとする。生産力の向上がなされるとその資本家が生産する商品はその部門の平均より少ない労働時間で生産が可能となり、比較的により多くの剰余価値を得ることができる。これを特別剰余価値という。

3) 相対的剰余価値

－必要労働量の低下によって得られる剰余価値

労働力を生産するために必要な物資（生活必需品）の価値の下落で必要労働量が減少し資本家が得られる剰余価値を相対的剰余価値という。

第二部：現代のマルクス

6.マルクス経済学の現代応用

ここからはマルクス経済学の理論を応用して現代日本経済を見ていきたいと思う。

マルクス経済学の剰余価値をマルクスは資本家による労働者からの搾取としている。現代における剰余価値という形での労働者からの搾取はどのように行われているのであろうか。第一部で紹介した三つの剰余価値を順に見ていく。

1) 絶対的剰余価値

絶対的剰余価値を増加させるためには剰余労働の増加、つまり必要労働（賃金）は同じままで労働時間だけ延長させることが求められる。これは日本の企業の多くが利益を出すために行うことでありサービス残業といわれる。労働基準法から見ても違法ながら現実社会では広く行われており、正社員の5割、非正規社員の3割が「残業をせざるを得ない」と答え、その平均時間は正

社員20,0時間、非正規社員9,5時間であった³。

こうした違法な方法での搾取はもちろん許されるべきではない。またサービス残業以外にも労働時間規制の撤廃（ホワイトカラーエグゼンプション）の導入なども絶対的剰余価値を増大する方法の一つである。経団連は年収400万円以上の労働者に適用しようとしている⁴。

2) 特別剰余価値

生産性の上昇によって得られる特別剰余価値の獲得は主に不況期に企業が行うようになる。不況期には生産過剰により価格が下がるため、剰余価値（利益）が少なくなるか、消失する。そのため資本家は生産性を向上させる（効率化を進める）ことによって特別剰余価値を増やそうとする。

→同じ生産量でも労働者が少なくて済む→失業

EX)トヨタはリーマンショック後生産性を向上させ2008年と比べて同じ投資額でも2倍の生産性を得た。車体プラットフォームの共通化なども進めた。

また、不況期に他の資本家に後れをとり生産性を向上させることができない資本家は需要減による価格の低下に耐えられないため市場から退場する→そこで働いていた人は失業

ただ、特別剰余価値獲得を目指すことは生産性を向上させ企業業績を回復させ新たな労働者を雇うことにもつながるので一概に悪ということはいえない。

3) 相対的剰余価値

失われた20年という長期のデフレの中で物価の下落が続いていたがそれよりも賃金（必要労働量）が低下し、労働者の生活が悪化してきた＝実質賃金の低下

つまり必要労働を資本家が必要以上に下落させて相対的剰余価値を獲得してきたことがいえる。

トマ・ピケティは『21世紀の資本』の中で、資本家と労働者との間の格差を示しており R （資本収益率） $>$ G （経済成長率）

つまり資本家が得る利益率が労働者が得る利益率よりも多くなり格差が拡大することを示している。実際、1980年以降格差は拡大している。

7.まとめ

ここで私が紹介したことはマルクス経済学の一部の理論だが、これを礎にしてマルクス経済学の解説等を読み現代経済への理解を深めてほしい。また、私たちが住む日本は資本主義国家であるが完全な自由市場のなかにはいるわけではなく政府の規制や社会保障などの社会主義的な面も多く持っている国家である。上手く社会主義の良い面も取り入れながら資本主義の利点を生かし国民が幸せになれる社会の実現の道を探ることが求められる。

³日本労働総連合会の調査

⁴ 2005/06/21 日本経済団体連合会：ホワイトカラーエグゼンプションに関する提言

参考文献

基礎経済科学書編／2008年『現代はまるで資本論』

延近充著／2015年『21世紀のマルクス経済学』

的場明弘著／2010年『一週間で資本論』

中野正著／1972年『経済学原理』